

## 「大学史」講義の方向性についての私論

佃 隆 一 郎

要 約：最近各大学で広がりつつある「大学史」など「自校教育」の授業は、愛知大学でも「大学史」リレー講義として今世紀初めに数年間実施されたが、現在は開講がストップしてしまっている。「大学史」(大学全体の歴史)と「自校史」(自らの大学の歴史)のいずれに重点を置いて進めていくかは、個々の大学の特性にも関連する難しい問題があるろうが、愛大での復活の際は、教訓からといって自校史にシフトすべきであろう。一方でまた、関連授業での大学史の深化も必要と考えている。

キーワード：大学史、自校教育、自校史教育、大学文化史学、愛知大学、東亜同文書院、東亜同文書院大学

### はじめに

近年のわが国の各大学では、基準の大綱化にもよってか新たなパターンの科目が多種にわたって開講されてきているようであり、その中でも「大学史」などの「自校(史)教育」を導入する傾向は確かに見られている。その背景には、各大学(法人)が創立数十周年といった節目に「年史」を編纂したことにより、自らの学校の歴史を体系的に位置づけられるようになったことのほかに、大学の大衆化にともない多様化してきた入学・在学者に、自らの学校を“売り込む”必要性が生じてきたこともあると思われる。

私の出身大学・大学院であり、卒業・修了後も非常勤講師や委託職員などで籍を置いている愛知大学でも、2000年代初頭に数年間リレー講義として「大学史」が開講され、同大学の年史関連の職に携わっていた私も参加した。その詳細についてはすでに『愛知大学史

研究』などで報告したが<sup>(1)</sup>、諸事情により現在「大学史」の開講は中断してしまっている。その後も自校史の啓蒙としては、新入生に対して入学式での関連図書配付や大学史展示室の見学といった施策は継続・新設されていて、私も展示室見学では案内役を担当している一人であるが、「大学史」を講義科目として復活させることを望む声もたしかに上がっているように見受けられる。実際に同大学の複数の専任教員によって、「大学史」講義継続時から同講義を実践した上での改善案が発表されているのであって、ほかの大学ではそういった“試行錯誤”によって関連講義を充実させているところもあるようである。私もそれに応じ、続く形で、これまでの一連の動向を自らの経験とともども紹介した上で、今後の愛知大学および私自身における、「大学史」講義の可能性と方向性を探っていきたい。

このように本稿では、「大学史」などの「自校(史)教育」講義(以下両者を使い分ける

(2)

「大学史」講義の方向性についての私論

ことにしたいが、ここでは大学全体の「大学史」と自らの大学中心の「自校史」とで区別する)は意義があり、愛知大学でも復活すべきであるという観点や立場に基づいて述べていくが、「大学史」講義をひとまず取りやめた大学当局へのそれ以上の他意はないことを、あらかじめお断りしておきたい。また本稿は、私も所属している(愛知大学史に関する案内や資料管理が一所掌の)東亜同文書院大学記念センター自体の見解ではなく<sup>(2)</sup>、あくまで私個人によるものである。よって、題名に「私論」と付け加えた次第である。

### (1)「大学史(自校史教育)」講義導入の潮流

#### ・新聞に取り上げられた「広がる自校教育」

「大学史」をはじめとする「自校(についての)教育」の講義・授業を取り入れている大学は、岩手大学の大川一毅准教授が実施した各大学へのアンケートによると、2008(平成20)年の時点で752校中136校に及んでいて<sup>(3)</sup>、その後さらに増加し、内容も多岐にわたってきているようである。各校で実施されている「自校教育」授業名の一例を下の〔表1〕にあげる。

近年までの各大学での「大学史」講義導入の動きについては、新聞の大学関連特集でもしばしば取り上げられてきている。例えば、『朝日新聞』2012年10月12日付の「教育」(毎週金曜日に掲載)では「学んでほしい 母校のこと 自校の歴史 大学が授業」と題し、

自分の大学の歴史や現状を教える「自校教育」が、各地の大学で活発だ。受験対策に追われて、入った大学のことをよく知らない……(記号原文)。そんな学生に、誇りを持って新たな目標への気持ちを高めてもらおう狙いだ。

と前置きして、追手門学院大、成城大、広島大、香川大、明治大、九州大の順で各大学で

の実践例と、一部の大学での関係者のコメントを紹介している。その上で「自校教育は1990年代後半から本格化した。80年代から各大学で大学史を編む作業があり、資料収集が進んだことが背景にある」と背景や状況を説明して、「大学にとって自校教育の意義とは何か。『学生や職員に大学への参加意識が生まれる』と、立教大教授時代に始めた寺崎昌男・東京大名誉教授は指摘する」と、続けて同氏の談話を紹介して「教員だけではなく、学内の色々な人や力を活用することが大切だ」と結んでいる。

| 大学名   | 授業名                  |
|-------|----------------------|
| 北海道大  | 学問の世界                |
| 岩手大   | 大学の歴史と現在             |
| 明治大   | 明治大学の歴史              |
| 立教大   | 立教大学の歴史、立教学院と戦争      |
| 成城大   | 成城学園を知る              |
| 名古屋大  | 名大の歴史をたどる            |
| 岐阜大   | 岐阜大学の教育研究と運営         |
| 京都大   | 京都大学の歴史              |
| 大阪市立大 | 大阪市立大でどう学ぶか          |
| 広島大   | 広島大学の歴史、広島大学のスペシャリスト |
| 香川大   | 人生のキャリア              |
| 九州大   | 九州大学の歴史              |
| 大分大   | 大分大学を探ろう             |

〔表1〕「自校教育」の授業の例

(『朝日新聞』2012.10.12記事の付表より)

また、地元(中部地方)基準の記事としては、『中日新聞』2014年4月8日付の「いまだキッ! 大学生」(毎週火曜日に掲載)で「広がる『自校教育』」と題して、

自分の大学の歴史や社会的使命を学生に教える「自校教育」を、授業に取り入れる大学が全国的に増えている。ひと昔前なら入学式のあいさつやガイダンスで軽く触れられる程度だった。広がる背景

には、以前より大学への愛着が薄れたり、学びの意義を見いだせない学生が増えてきたとみる大学側の危機意識がある。

と、先の朝日記事と同様の表現もまじえて述べた上で、豊田工業大と愛知東邦大（いずれも名古屋市内）の例を紹介し<sup>(4)</sup>、さらに以下のように「地元」と全国の動向を伝えている。

中部地方の私大ではこれまでも、キリスト教を背景に持つ南山大や名古屋学院大が宗教科目の一部として建学の精神を伝えてきた。相山女学園大や名古屋女子大なども20年以上前から自校教育を行ってきたが、こうした例は珍しかった。／全国的に取り組みが広がり始めたのは1990年代後半から。立教大や明治大、早稲田大などで大学の歴史を振り返る授業が始まった。／（中略）／国立大でも名古屋大が99年、岐阜大が2000年、広島大が01年からと自校教育科目の開講が相次ぎ、04年の法人化後はさらに増えてきた。

（一部漢数字を算用数字に改めた）

ここでも寺崎昌男氏について、今の引用文の中略箇所「教授時代に立教大の授業を担当した」立教学院本部調査役として同氏の談話が紹介されている。

「多くの大学で入試難易度を見て入れそうだからという理由だけで進学する『不本意入学者』が増えた。この大学がなぜできたのか、課題は何かを考えさせることで大学に精神的な居場所を見つけてもらい、自発的な学習を促す効果がある」と話す。

この「不本意入学者」に精神的な居場所を」という観点は寺崎氏の持論であり<sup>(5)</sup>、筆者個人もこれまでの実践に際して重視してきたが、それについては後述する。

少なくとも、近年相次いで新聞がこのように記事に取り上げたことは、各大学での「自校教育」導入の広がりが注目されていることの証しであろう。

## ・「大学史」「自校史教育」への取り組み

こうした「自校史教育」の広がりとは別に、「大学史」としての研究の面では、『早稲田大学百年史』の編纂に携わった佐藤能丸<sup>よしまる</sup>氏が、先駆者の業績と自らの経験から「大学文化史学」という概念を、自著『大学文化史—理念・学生・街—』（芙蓉書房出版、2003年）で提唱している。そこでは、

私は、次第に、大学の歴史の研究・編纂は高等教育史・大学史研究という「教育史学」の範疇からのアプローチだけではなく、広く歴史学の日本近現代史の研究の一環としてなされることが必要であることを実感として抱くようになり、積極的に「大学文化史学」という新しい学問分野を提唱して、この視点から大学の総合的な歴史的解明を試みたく思うようになったのである。換言するならば、歴史的・社会的存在として発展してきた大学の歴史は、従来の「教育史学」では、もはや、十分に解明しきれないのではないだろうか、との考えを抱かざるを得なくなったのである。（18頁）

として、日本近現代史としての立場から大学史（とりわけ私立の場合）は、それぞれの大学の歴史に密接に関わりを有する諸分野を網羅した『大学文化史学』に基づく大学関係総合史としての観点から解明されなければならない」との結論を示しているが、さらに「多面的な領域から、複眼的な総合的視角から検討を加えるという、総合性こそ今後の大学史研究の大きな課題であろうと思う」（19頁）と問題提起もしている<sup>(6)</sup>。「大学文化史学」はいまだ抽象的な観念であることは否めまいが、「大学」を構成する各方面から「大学史」を追究することができるのではという点から言えば、講義や講演・展示活動で「大学史」を推進しうる原動力にはなろう。

いっぽう、「大学史」をはじめとする「自校史教育」の推進という面では、特定の教員

(4)

「大学史」講義の方向性についての私論

の研究のみによってなりうるものではなく、大学史の資料編纂室など、大学側が設立した組織・機関における職員の日常的な業務も重要な原動力となる。そういった組織によって継続的に刊行されている機関誌や紀要では、教員と専門職員の双方から、自校史教育についての報告的論稿が少なからず発表されているのであり、それらの代表的な一例を以下紹介したい。

まず、名古屋大学では大学史資料室の山口拓史氏（機関名と所属はいずれも当時。以下同）が、2003年の段階で「国立大学における自校史教育の意義」と題して、それまでの名古屋大での自校史教育について、実施の背景、位置づけ、実際の進行を順に述べてから、「自校史教育の展望」としてこう結論づけている。

筆者は、これからの大学においては、入学直後の学生がその後の大学教育において自主的・自律的に学習を進められるような準備教育が求められるようになり、その準備教育の具体的内容として、自学自習のための図書館利用に関する教育や情報メディア・ネットワーク活用のための教育と並んで、アイデンティティ確立と学習意欲向上のための自校史教育が念頭に置かれるべきであると考えている。（113頁）

この論稿はすでに10年以上前のものであり、その後（表1でもあげられていたように）現在に至るまで同大学ではさらに自校史教育の実施が、改良を続けながら進められているはずであるが、発表時の“最新”の「自校史講義」スケジュールを〔表2〕に別掲する。

さらに、明治大学で百年史の編纂や、大学史資料センターの設立・運営に携わってきた鈴木秀幸氏は、それまでの一連の関連活動を自著『大学史および大学史活動の研究』（日本経済評論社、2010年）にまとめ上げ、そこでの「自校史教育の歴史と現状・課題」の章の「おわりに」として、

| 回  | 題                  |
|----|--------------------|
| 1  | 洋学の受容と専門教育制度の整備    |
| 2  | 旧制大学の成立            |
| 3  | 旧制大学の展開            |
| 4  | 旧制高等教育諸学校の成立と展開（1） |
| 5  | 旧制高等教育諸学校の成立と展開（2） |
| 6  | 旧制高等教育諸学校の成立と展開（3） |
| 7  | 新制大学の成立            |
| 8  | 大学における戦後改革         |
| 9  | 大学院教育と名古屋大学史       |
| 10 | キャンパス史からみた名古屋大学    |
| 11 | 名古屋大学のスポーツの歩み      |
| 12 | 学内建築物と名古屋大学        |
| 13 | 人物からみた名古屋大学史       |

〔表2〕2002年度の名古屋大学での自校史講義スケジュール

※基本的に大学史資料室スタッフが担当し、11、12回目は学内内部局講師による。  
（山口上記論稿100頁）

以上、本章では自校史教育の歩みと現状を管見してきた。それは前向きに新しい学問教育の創造をめざすものではあるが、一方では試行錯誤の連続であった。そして、そのことは相変わらず続いている。／だが、大学史活動の現場からの実践に基づいて、また時には「負」の部分や調査研究上の未完の事柄も隠さず訴えようとしてきたのも事実である。そうではないと、新たな学問研究・教育実践への挑戦は持続しないし、目的も達せられないからである。（76～77頁）

とした上で、「各大学の中でも早期に自校史教育に取り組んだ明治大学の場合を主に」紹介している。最後に鈴木氏は、

それにしても、当初は私立大学がほとんどであった自校史教育を国立大学でも実施するようになった。また全国的組織の全国大学史資料協議会においてもしばしば研究テーマとして取り上げるようになってきた。このことは、新しい学問研



究・教育を追及（求カ）するうえで大きなきっかけとなろう。（同）

と結んでいるのであって<sup>(7)</sup>、その前半部にある“自校史教育の広がり”は、まさに先の各新聞記事が示す通りなのである。

## (2) 愛知大学での「大学史」講義の“試行”

### ・「大学史」講義の導入と実践

前項冒頭での大川准教授の調査が実施された時期は、私の一勤務大学である愛知大学でもちょうど「大学史」のリレー講義が新設され、私も常時関係していた頃であり、先の「136校」の中に含まれていたことになろう。

愛知大の場合は、1996（平成8）年の創立50周年以後、1998年の（前身といえる東亜同文書院大学関係を含めた）大学史展示室新設および、2000年の『愛知大学五十年史 通史編』刊行を契機として、「愛大の歴史」をより広く、在学・卒業生や関係者に知ってもらうことの必要性が意識されはじめたのであり、創立60周年にあたった2006年には、3月に『…五十年史…』の普及版の『愛知大学小史 六十年の歩み』が梓出版社より刊行されたのに続き、9月には同書をテキストに位置づけたリレー講義「総合科目1 大学史」が、まずは名古屋（三好）校舎で新たに開講され、翌07年4月には同様の形で「大学史」として豊橋校舎（短大部を含む）でも新設されるにいたった<sup>(8)</sup>（以下、科目名の呼称は両校舎とも「大学史」に統一）。

愛知大での「大学史」リレー講義の特徴は、「自校史教育」に終始することなく教育機関としての「大学」全体の歴史も取り入れたことであり、これは先の名古屋大の場合も同様であるが、愛大ではさらに「世界の大学史」をも包含した構成にしたことに注目された。私は東亜同文書院大学記念センター内の「大学史事務室」の非常勤職員でもあったことから、いわば「現場スタッフの代表」とし

て当初よりリレー講義の一員を任されたが、コーディネーターを務めることになった海老澤善一教学担当副学長から委託を受ける形で、実質的コーディネーターとして毎回講義に参加することになった。とりわけ私は第1回目の講義を事実上単独で担当することになったことから、個人的にも（学生の心情に訴えうるものとして）共鳴した寺崎氏の「不本意入学者に精神的な居場所を与えるための自校史」という視点を前面に出してみた所存である。

私に機会を下さった「教学担当副学長」であるが、実際は結果的に同副学長が相次いで交代することになったため、そのポストに就いた教員は毎年変わることになった（私の役割は継続）。その中で、3年目の2008年度に担当者となった太田明氏（翌年他大学に転出）は、講義開始初年度の2006年7月に愛知大学後援会支部総会で「大学史」講義も念頭に置いた講演を行ない、その内容を同年にまとめてこの『一般教育論集』の第31号に「大学史をどう語るか—大学史講義案—」として発表した。その冒頭で、太田氏は「大学史」講義の導入意義についてこう説明している。

大学改革の時代を取り上げたのは、現在の大学が置かれている状況という苦境を大学の外側におられる方々に理解してもらうのはなかなか難しいと推測されるからである。昔の大学はよかった、昔の本学はこうじゃなかったというノスタルジーに浸ってもらうだけでは困る、なぜ大学はこんな活動をしているのか、なぜ大学が窮屈になったのか、そうした点を同窓生にも後援会の方々にも理解してもらうためである。／（中略）こうした方針はなにも後援会向けの講演に限られるわけではない。学生向けの講義でもまったく同じである。現在の大学は一体何をしているか、何でオレは／（記号原文）ワタシは大学にいるのか（望むと望まざ

(6)

「大学史」講義の方向性についての私論

るにも関わらず)。そうした問いがもし起きるとすれば、それに応答してやることも大学教育の一つの重要な役目であろう。(110頁。補足的記述としてのカッコは原文—以下同一。また、この原文では句点をピリオドで記) こうして愛知大学でも始まった「大学史」講義であったが、続けていくにつれて大学史全体から(東亜同文書院大を含めた)自校史へ重点を移すなどの方針変更がやはりあって、各年度の教学担当副学長の意向や担当者の交代・辞退も加わり、内容はある程度変化することになった。それぞれの年度の状況については註(尾注)1であげた各報告を参照されたいが、ひとまず、現在のところ最終実施年度になっている2009(平成21)年度の講義スケジュールを、〔表3〕に示すことにする。

#### ・「大学史」講義の打ち切りと問題点

いま2009年度を「最終実施年度」と記した

ように、ひとまず愛知大学での「大学史」講義は、その年限りで打ち切りとなった。したがって、2012(平成24)年に名古屋駅近くの笹島地区に開校し、愛知大学生の過半数が集まることになった新・名古屋校舎では、いまだ一度も「大学史」講義は行なわれていないのであり、やはり残念なところである。

「大学史」講義打ち切り決定の理由やそれまでの経緯については、私もある程度は聞いているところであるが、やはりここでは述べてはならないこともある。ただ初年度が名古屋(三好)校舎のみでの開講という形になったように、愛知大での「大学史」講義の実施には当初から紆余曲折や試行錯誤、それに反対意見があったということは、記しておかなければならない<sup>9)</sup>。科目新設の際武田信照学長とともに尽力した、前記の海老澤善一教学担当副学長は『愛知大学史研究』創刊号でのシンポジウム報告(註8参照)「近代大学の誕生」の末尾でこう明かしている。

| 回  | 題 (担当者—一部肩書付記—)            |
|----|----------------------------|
| 1  | 「大学史」の解題(副学長・功刀由紀子)        |
| 2  | 愛知大学創設の経緯(今泉潤太郎)           |
| 3  | 愛知大学創設の理念(大島隆雄)            |
| 4  | 愛知大学キャンパス案内(筆者)            |
| 5  | 東亜同文書院大学から愛知大学へ(元外交官・小崎昌業) |
| 6  | 東亜同文書院大学の「大旅行」(藤田佳久)       |
| 7  | 「愛大事件」とは何か(豊島忠)            |
| 8  | 薬師岳での山岳部遭難事故(山田義郎)         |
| 9  | 愛知大学での正課外活動(テレビ愛知職員・中本克樹)  |
| 10 | 大学紛争と大学改革(筆者)              |
| 11 | 大学の起源—西欧中世大学—(北嶋繁雄)        |
| 12 | ベルリン大学と日本の大学(河野眞)          |
| 13 | 日本における大学の発展(武井義和)          |
| 14 | 愛知大学の現在(学長・佐藤元彦)           |

〔表3〕2009年度の愛知大学での「大学史」講義スケジュール  
(春学期—前期—の豊橋校舎でのもの)

※今泉・大島・北嶋各氏は元教員として、小崎・豊島・山田・中本各氏は卒業生として、武井氏と筆者は東亜同文書院大学記念センター研究員として、それぞれ担当に参加

自校の歴史を知ることは学生にとって自らのアイデンティティーを確立し、かつ批判的意識を持つためにも重要なことと考えたが、自校の歴史を講義するだけでは偏りが生じかねない。そこで世界の大学史のなかに本学の歴史を位置づける工夫をし、講義の半分は世界と日本の大学史に割いた。しかし科目の新設は容易ではなかった。「大学史」の講義は「愛校心」の強制につながるという意見もあったが（この考えは私にはいまだに理解できない）、「大学史」に限らず科目の新設に十分な協力が得られなかった根本的理由は、カリキュラム委員会（新設の教学委員会の内部組織）が外部から新設科目を強制されたという思いがあったのではないかと憶測している。（40頁）

ともあれ、「大学史」講義が打ち切られてからは、新入生へのガイダンス科目で自校史教育の場も設ける方針がとられているようであるが、打ち切り1年後の2011年3月に、担当者の一入であった藤田佳久教授（のち名誉教授に）・東亜同文書院大学記念センター長が定年退職に際し、『愛知大学文学論叢』に発表した論文「愛知大学自校史教育試論」では、愛知大での一連の「大学史」講義について以下のように、（反省点をあげる形での）総括と今後のための問題提起がなされている<sup>(10)</sup>。

自校史の相対化の努力や工夫にもかかわらず、大学の制度史や観念論的指向性を中心となり、教え込む方法がくりかえされたように思われる。自校の多くの歴史的事実が開陳されても、学生側からはあまり共感を得ることは出来なかったということであろう。（中略）教員側からの自校史の客観化、相対化の一方、学生側からは自校史ゆえの共感や異和感（違和）という主体的、主観的アプローチのバランスが問われているということになるだろう。そこに自校史教育の特性が存在す

るといえる。（29頁）

私から振り返ってみても、愛知大学での「大学史」講義は「大学史」か「自校史」かという重点の置き方がぶれたまま、方向性がはっきり定まらないうちに打ち切られてしまったように感じられる。しかし私としては、「大学史」講義実施の間に受講生から寄せられた、「自分の通う大学を知ることが、当たり前で必要なことだと感じた」<sup>(11)</sup>などの多くの声を信じている。

### (3) 筆者が考える「大学史」講義の位置づけ

#### ・筆者個人の「大学史」講義の実践と所感

私は愛知大学で「大学史」講義を担当する一員となりえたことから、以後各大学で新規に講義をする機会を得た場合は、（特定のテーマが指定されていない限り）教育史の一環としての「大学史」を盛り込んでみようと考えているにいたった。ちなみにそれまでの私の担当講義は、日本近代の「軍隊」と「戦争」を軸としたものであったが、「軍隊」として愛知大学の敷地や施設の“前身”であった旧陸軍の部隊・学校についても取り上げてきたところであり、ある意味での「大学史」として自分自身位置づけていた<sup>(12)</sup>。

そして2009年度に、愛知県の西三河地区にある私大で「歴史学」の担当を得ることになり、ここで私は、「大学史」と「十五年戦争史」を組み合わせる主要テーマにすることにした。その構成としては、各回前半の40分ほど「歴史」についての説明やエピソードを一回で完結する形で行なって（1時限目であり遅れてきがちの）出席者がそろのを待ち、後半で“本題”を講義する形をとったが、そこではまず「大学史」研究・教育の広がり前記の「大学文化史学」の紹介をまじえて述べて、日本で（現在の意味での）大学が誕生した明治維新时期から、1918年の大学令公布に

(8)

「大学史」講義の方向性についての私論

よって旧制大学が名実共にほぼ出そろった時点までを（5、6回分をかけて）概述し、そこから1931年の満州事変勃発による十五年戦争の発生と拡大から結末までの経緯を述べた上で、同戦争の大学教育への影響を見せる形で視点を大学史に戻し、戦後の学制改革から大学の大衆化（にも伴なって起こった紛争）、そして現在の大学に共通した問題の説明で締めてみた<sup>(13)</sup>。

このように展開、継続してみた「歴史学の中の大学史」であるが、どの大学のどの学生であっても「自分は今“大学”という高等教育機関に籍を置いている学生」であることは変わらないものであり、自校史や一教育史という視点にとどまらず、その大学生に「自分の立ち位置」を再確認してもらおうという意義はあると信じて進めてきた。受講生からの具体的な反応は、そこでの担当が終わる2013年度まで把握・確認するまでには至らなかったが<sup>(14)</sup>、「自校史抜きの大学史」を講義として成立させる可能性については、機会があるごとに追求してみたい。

#### ・今後の愛知大での「大学史」「自校史」教育は

愛知大学での「大学史」講義に戻れば、前記の藤田佳久氏は先の論文の後半で「愛知大学自校史教育の一試論」と題し、「愛知大学史編纂と教育カリキュラムの対応過程をふまえ、筆者のこれまでの東亜同文書院大学記念センターでの経験から」「愛知大学史にかかわる教育への展開を今後考える上での一つの私案」として、下の〔表4〕のような「今後の一つのたたき台」を提示している<sup>(15)</sup>。

このように、藤田氏は「大学史」講義の再開を、（愛知大学の直接の前身とまでは言えないが、こん日では事実上公式に「前身」と位置づけられるようになった）東亜同文書院（大学）にも半分近くのスペースを割いての「自校史教育」として望んでいるのであって、

| 回  | 題（副題は略）           |
|----|-------------------|
| 1  | 荒尾精の清国論           |
| 2  | ビジネススクール東亜同文書院の開学 |
| 3  | 書院を経営した東亜同文会      |
| 4  | 北京官話を学んだ書院生       |
| 5  | 脚で刻んだ中国と東南アジア     |
| 6  | 書院焼失と大学昇格         |
| 7  | ドラマチックな愛大誕生史      |
| 8  | 寮歌と学生歌は旧制大学       |
| 9  | 本間喜一学長の世界         |
| 10 | 初の中日大辞典の編纂と刊行     |
| 11 | 揺れた大学             |
| 12 | 三キャンパスへの分離と統合     |
| 13 | 学生達の愛大スタイルとその変化   |
| 14 | 卒業生はどうなった         |
| 15 | 愛大学は成立するか         |

〔表4〕 藤田佳久氏の「愛知大学自校史」講義案

（前掲「愛知大学自校史教育試論」33、34頁）

「大学史」講義に携わってきた私としても、この流れは妥当なものであると思う。東亜同文書院の歴史は、愛知大学にとって大きな遺産なのである。

先述した『愛知大学小史』のあとも、藤田氏をはじめとする学内外の各氏によって、東亜同文書院・愛知両大学の歴史に関する学生・一般向けの本が続々と刊行されているのであって<sup>(16)</sup>、公式ホームページの記述やメディアへの働きかけから言っても、「同文書院から愛大へ」は当大学の学生募集戦略の一翼になうようになってきていることは明白である。現在は主に豊橋校舎の新入生を対象にした形で実施されている「東亜同文書院・愛知大学史ガイダンス」が、名古屋校舎をも取り込んだ形で新たな「自校史」講義として再開されることを、私も関係者として切に望んでいるが、それとともに全体的な「大学史」の側面が講義から離れていくことになれば、そこでまた私としては複雑な心境になる。



幅広い「大学文化史学」の観点から、「自校史」と関連させる形で教育史や教職課程での「大学史」の教示の場が保たれ、続いていくことも願わずにはいられない。

## おわりに

今2014年度も先の新聞記事のように、「大学史」などの自校教育科目は全国の大学において、確かな形で行なわれているはずである。一方で愛知大学では、「大学史」（に相当する科目）の復活は、現に話は出ているようであるものの実現しないままになっているが、数年間の開講を通じて、太田・藤田氏らの関連論文も出されてきて、問題点は具体的に浮かび上がっている。愛大での科目復活のチャンスは、創立70周年を2年後に控えた今こそ来ていると感じている。ただこれまであまりはっきりさせてこなかった「大学史」と「自校史」との区別は、関連科目ともども定着させていくためには必要不可欠となろう<sup>(17)</sup>。

私自身についていえば、20世紀終盤に『愛知大学五十年史』の編集に携わって以来、「大学史」「自校史」双方への知識を（後者では卒業生ということもあり）前向きに蓄えてきた自負心はある。ただ現に愛知大学での自らの講義実践の場では、それらをも取り入れたことによる各方面からの理解が、充分には得られなかったのも事実であるが<sup>(18)</sup>、私としては今後とも少しでも、愛大に限らずご縁を下さった大学に貢献していけるよう、「自主的テーマとしての大学史」と「仕事としての自校史」とのいずれをも実践しよう、今後も「大学文化史学」の可能性を追求しつつ、研鑽を積んでいかなければなるまい。本稿はそのための、いわば序説としてのものである。

自らの「大学史」「自校史」双方での具体的な授業案は、いつでも機会に迎えられるよう練っていききたい。

（愛知大学での「大学史」講義に通常的な参加の機会を下さいました歴代の教学担当副学長ほか関係の方々には、改めて感謝の意を表します）

## 註

- (1) 「大学史」講義について、私は本文で後述するように“現場の責任者”となったことから、関連のシンポジウムともども愛知大学東亜同文書院大学記念センター刊『愛知大学史研究』創刊号～第3号（2007～09年）および同センター刊『オープン・リサーチ・センター年報』5号（2011年）に各年度の報告を（私の名義で）掲載した。
- (2) 愛知大学の東亜同文書院大学記念センターは1993年に設立されたが、当初は『愛知大学五十年史』編纂のために同時期に立ち上げられた五十年史編纂事務局とは別の部局であった。2000年の『…五十年史』通史編刊行（資料編は1997年刊。いずれも同史編纂委員会編）による事業完了にともない、編纂事務局は翌年3月で廃止されたが、創立60周年事業のために2004年、同文書院記念センター内の大学史事務局として復活し、12年に業務が完全に一体化された。
- (3) 本文であげた『朝日新聞』『中日新聞』記事のいずれも、この調査データを取り上げているが、『朝日』記事では続けて、「自校のことだけで授業をつくったり、授業の一部で自校の歴史に触れたり、やり方はさまざまだった。『検討中』も33校あった。『増加期は一段落し、今は各大学が授業の改善や充実をしている段階だ』とみる」とある。
- (4) 「例」の内容としては豊田工大が、必修科目の一環としてトヨタグループの織機と自動車の歴史を展示する産業技術記念館を新入生に見学させていることおよび、愛知東邦大が、明治以降の中部地方の歴史と運営する法人との関わりを中心にした授業「東邦学園と中部圏」を新設したことが述べられている。
- (5) 寺崎昌男氏（正確には「寺崎」）は、以前より自著で「自校教育」にふれるつど、「不本意入学者」の存在を取り上げ、それへの対処の重要性を訴えているのであって、愛知大学での「大学史」講義の新設時には、同氏の『大学は歴史の思想で変る—FD・評価・私学—』（東信堂、2006年）の一節（講演記録）のコピーが、当時の武田信照学長より関係各方面に配付さ

れた。

- (6) 佐藤能丸氏は「大学文化史学」を構成するそれら「諸分野」を、教育・当局・学生などの各方面から計30種（および「その他」）をあげているのであり、また、大学史研究に際し「特に留意しなければならないことは、政策や計画の経緯の説明（中略）で事足れりとするのではなくて、『実態』がどうであったのかという、総合的な『実態史』を心掛けることが歴史学として最も必要」とも主張している（『大学文化史』19頁および20頁図表）。

- (7) 引用文中にある「全国大学史資料協議会」は、自校史に携わる各大学職員が連携した会であり、愛知大学東亜同文書院大学記念センター（および統括部局の豊橋研究支援課）もその東日本部会に所属していることから、同協議会については前掲註1の『オープン・リサーチ・センター年報』や同センターの『同文書院記念報』での活動報告を参照されたい。（2010年には例会が愛知大学豊橋校舎で開催され、それに併せて愛知大学史の企画展を実施）

- (8) 豊橋校舎での「大学史」新規開講に先立つ2007年3月には、その前に名古屋校舎で実践した同講義を報告するシンポジウム「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」が、愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催で豊橋校舎にて開催された。そこでの報告と討論は前出の同センター刊『愛知大学史研究』創刊号にまとめられたので、詳細および当初のリレー講義の構成についてはそちらを参照されたい。

その中で、教学担当副学長であった海老澤善一氏は、本文で後述する『「大学史」科目新設の経緯』の末尾に、「大学史」講義が開設されるまでの段階として「2006年度からの新カリキュラムにおける新設科目の一つとして教学プロジェクトで構想し常任理事会を経て、その設置を新設のカリキュラム委員会の審議に委ねた」と述べている（40頁。本文での引用文はこれに続く記述）。

- (9) 愛知大学での「大学史」講義での“誤算”として、2年度目以降双方で開講することになった豊橋校舎と名古屋（三好）校舎とで、受講生の数に大きな隔たりが生じたことがあげられる。すなわち、実施最終年度の2009年度には、春学期（前期）の豊橋では200名以上に達したのに対し、秋学期（後期）の名古屋では10名余りに過ぎなくなってしまったのであって、名古屋での少なさは必修科目と重

なったことが考えられたが、同じ曜日の午後を設定した初年度は100名近くであったことから、この大幅減少は今後のために解明すべき問題であろう。

- (10) 藤田佳久氏は東亜同文書院（最終時大学）が実施していた「調査大旅行」を解明してきた人であり、「大学史」講義を自校史中心にシフトさせる方針変更にともない、3年度目の2008年度より同講義に加入した。この論文では、註7の「全国大学史資料協議会」についても、藤田氏自身が熊本大学での全国総会に参加したことを含めて具体的に言及されている（17～23頁）。

- (11) 拙稿「愛知大学キャンパスツアー」（前掲『愛知大学史研究』第2号、2008年）67頁。2007年11月に名古屋（三好）校舎で初めて実施した「豊橋校舎へのバスツアー」（初年度の2006年は実施できず）での、当時の経営学部1年生の感想の一節である。なお、このバスツアーについては現在の名古屋校舎の現代中国学部1年生に限定の形であるが、2012年度より復活している。

- (12) このことに関する実践（愛知大学および豊橋技術大学）は、2003年に本『一般教育論集』の第24号で「日本近現代史における『陸軍軍縮』講義」と題して報告。愛知大での当該講義「日本史」（教職課程）について、さらに2013年に同誌の第44号では「教職課程講義『日本史』を担当して」として報告したが、実は同講義については2006年度と2010年度の担当で、「大学史」を基幹テーマの一つとして組み入れてみた。

- (13) ここで「大学史」の流れを説明するための板書事項は、本文や註6であげた佐藤能丸『大学文化史』での記述をもとに作成した（上記の「日本史」も同様）。同書は大学史の概説書としてもすぐれていると、私は考えている。

本格的な「日本の大学史」を述べた書としては、例えば天野郁夫『大学の誕生（上）（下）』（中公新書、2009年）をあげておきたい。

- (14) 愛知大学職員との間の連絡で私が得た、その大学での「歴史学」は3年生以上（当初は2年生も）を対象とした一般教養科目であり、受講生は相当数の中国人留学生を含めて最大時100名以上に達していたが、私がこれまで担当した各大学に比べ素行に問題のある学生も（年によってであったが）目立ち、対応に苦慮したことも事実であった。それが結果的に私にとっての印象に影響を及ぼしたことは

否めず、ここでは大学名を伏せることにしたが、その大学では（私の最終年度にあたる）2013年度より、受講の姿勢を重視した積極的な単位評価方法を全学的に取り入れたところであって、その効果が現われていくことを願っている。

別であろうか）を展開することもできるのではなかろうか（なお、現時点は各大学で担当している講義では、「大学史」の要素は取り入れていない）。

- (15) 藤田氏はこの論文の最後で、愛知大での自校史教育復活のための「若干の提案」として、①自校史を主軸にできる教員スタッフの確保や養成、②さらに教育も担当できる人材の確保、③現場で実験しつつ愛大自校史を受講学生をも巻き込んだ形で成長させる、④東亜同文書院を軸とした愛大のグローバル化を検討課題にする、の4点を示している(35～37頁)。
- (16) 藤田佳久『日中に懸ける 東亜同文書院の群像』(中日新聞社、2012年)のほか、越知専『本間イズムと愛知大学 実例編—その真髄を実話から学ぶ—』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター、2009年)、加藤勝美『愛知大学を創った男たち—本間喜一、小岩井淨とその時代—』(愛知大学、2011年)、和木康光『知を愛し人を育み 愛知大学物語』(中部経済新聞社、2012年)が刊行されたのであり(越知氏は客員研究員および卒業生、加藤・和木両氏はプロライター)、写真集としては愛知大学東亜同文書院大学記念センターが『愛知大学東亜同文書院ブックレット別冊 愛知大学創成期の群像』を2007年に刊行し、無料配布している(定期的に刊行している同ブックレット本編では、東亜同文書院大の諸側面を紹介)。
- (17) 愛知大学での「大学史」講義導入の一淵源となった『愛知大学五十年史 通史編』(本文および註2参照)は、特色の一つとして戦後日本での大学の制度史も概観できる構成がなされた。のちの「大学史」講義にも、その構成が引き継がれたともいえるかもしれないが、受講生からの理解や支持が得られなかったとしても、『五十年史』のその部分は、今後の年史編纂や関連講義に生かされるべきであろう。
- (18) それは註12でふれた、一部の年の教職課程講義「日本史」のことであるが、「教員免許取得のための最低限の通史・概説」を根本方針にしても、半期で全時代を滞りなくこなすことは、これでまた無理があるのは明らかである。同講義の本格的な改善案は別の機会に述べてみたいが、教職には不可欠であろう「教育史」の主軸として、「大学史」(「自校史」は

